

一三 雨森芳洲の朝鮮語學

雨森芳洲、名は俊良又誠清、字は伯陽、東五郎と稱し、京都（或は伊勢）の人である。初め醫を學んだが、中途にして之を廢し、十七八歳の時江戸に出で、木下順庵の門人となつた。才藻卓絶人を驚かし、順庵の勧めに従つて對馬候に仕へ、一島の文教を掌ることとなつた。對韓政策に就いては新井白石や陶山訥庵等と屢議論を上下した事があつたが、其の私交に至つては頗る親密なるものがあつた。彼は儒者として有名なるのみならず、支那語朝鮮語にも造詣の深かつたことは周知の事實となつて居る。寶曆五年（朝鮮英祖三十一年）正月八十八歳を以て歿したが、其の遺著中には後世の學者を益したものが少なくない。

芳洲先生の國語に對する語學的研究として認むべきものは別に纏まつたものはない。支那語に關しては當時の唐音の事などに就いて説をなして居るものが諸書に散見して居るが、先生が實際に之を活用し、自由に談話をなし得る程度まで達して居られたかどうか今茲に斷言する譯には行かぬ。吾人が先生に

對して敬服するのは、其の朝鮮語學に關して吐露せられた意見である。それで今は専ら朝鮮語學者としての先生を論評して見たいと思ふ。

交隣須知

隣語大方

一道人

芳洲先生の朝鮮語に關する著書として最も有名なのは、彼の「交隣須知」であるが、こは先生が自ら釜山に赴き、同地に京城生れの朝鮮人を聘し、京城語を勉強して出來上つたものだと言はれて居る。其の後世を益したことは今更喋々と述べて立てる必要を認めぬ。又朝鮮語學書に「隣語大方」といふものがあるが、世間では之を以て矢張り芳洲先生の著であると稱して居る。併し余は多少之に對して疑を持つて居る。以上純然たる朝鮮語學書の外、先生の著たる「橘窓茶話」「橘窓文集」「多波禮具佐」等にも多少先生の語學上の意見が散見して居る。然るに余が嘗て同島に赴ける時、偶然「全一道人」なる語學書を披見することを得た。此の書は未だ世間に紹介せられて居ぬやうであるが、先生の語學的見識を窺ふに於て、最も貴重なる資料を供給するものである。其の内容の一斑を述べんに、先づ其の序に「我州の人およそ公事に役するもの、たれか韓語に志なからん。しかし其書もななく、また其數もなければ、ただに望洋の歎をいただけるのみ。こゝに四部の書を

らび、はしめに韻略諺文をよみて字訓を知り、次に酬酢雅言をよみて短語を知り、次に全一道人をよみて其心をやしなひ、次に鞆屨衣椀をよみて其用を達せしむ。こゝねがはくは其教の次第ありて其材をなすにちかゝらんとしかゆふ。
芳洲書

とある。次に凡例があつて、其の終りに享保十四年六月芳洲書と書いてある。此の序文によると、先生は「韻略諺文」、「酬酢雅言」、「全一道人」、「鞆屨衣椀」の四種の書を編み、朝鮮語學習を何人にも容易に出來得るやうにしたらしい。併し惜い哉、今日「全一道人」一種しか見ることが出來ぬ。此の「全一道人」は序にも「心をやしなふ」とある如く、道徳的の教訓を書いたものである。先づ第一には「孝部」六條として

チュルゼリイ。ミンソニラハノンサラミ。ゾノン
クハハトニ。イルツクサグモホコケイムイトウアトル、ナフニ。
손이랴
喪母
不견이니
ヒヨセギ

周の時間損といへる人字、子、孝行至極にて早く母をうしなひ、繼母ふたりの子をうみしに

のやうな文句體裁を以て始めて居る。此の話の材料が朝鮮の「三綱行實」又は「五

偷行實等に出て居るといふことは、大いに興味ある事柄といはねばならぬ。

先生の日鮮兩語の類似同源に關する説は餘り多く見ることが出來ぬ。新井白

石の「退私録」(卷中)に

「雨森藤五郎朝鮮の物語甲午十一月十八日、雨森東五郎入來、某問、朝鮮の俗語吾國の言葉と同じき事あるやう如何にといふ。答て云、四つ五つ同じ事ありと覺たり。柳ごりはこりと申、字には栲栳と書きてこりと讀む。又釜は俗語にかまど云、甲も俗にかぶと、云、是等の類候へども、餘はわすれたりと云。……………」

とある。甲子○は正徳四年に當り、芳洲先生の最も精力の盛んな時代であつたから、「餘はわすれたり」などいふことは、自分の謙遜から出た語としか思はれぬ。一體芳洲先生は此の種の事に關しては、自分の説を遠慮なく發表するやうな人でなく、頗る慎重な態度を採つて居たやうに思はれる。之に反し白石先生は氣象のさびくした人で、臆面もなく色々の論斷を下して居る。而して世間では芳洲と白石との間は餘り仲が好くなかつたやうにいつて居るけれども、白石が芳洲を幕府に推舉する文、其の他白石の書簡等を見ると、兩者の私交が甚だ濃かであつ

たことを知り得るのである。又一方では白石は芳洲に向つて朝鮮語に關する種々の質問をなして居る。白石が「東雅」に試みて居る大膽な日韓語比較論なども、其の材料を芳洲から得たものが蓋し尠なからぬ事だらうと思はれる。

次に芳洲先生の著「朝鮮物語」の中には「朝鮮の國語」として、朝鮮語の單語を出して居るが、それには體言のみならず、用言をも掲げ、しかも其の用言は

青ブルタ。赤ブルクタ。黄ブルタ。

のやうに語幹ステムの外にトといふ語尾までも附して居るなどは、さすがに素人のやり方といふことが出來ぬ。又其の單語中の或るものには、麥ポヲ、農夫バクセグ等の如く、右肩に小圈を附し、「○」この丸のあるところすむどにござるとの間也などと註して居るけれども、其の意義が不明である。又先生は朝鮮語にも方言の存せることを述べて居られる。

又芳洲は實際に朝鮮語を活用したので、發音の事なども随分やかましく言つて居る。即ち語を連呼する場合に起る發音上の變化の事など、他の所謂朝鮮語學者の言及しなかつた所までも注意を拂つて居る。例へば「全一道人」の凡例中に、全

이타をソニラと讀み、전이니をコニと讀むべきことを注意し、又翰林(한림)をハルム、萬里(만리)をマルリと讀まねばならぬといふ細々しい點までも指摘して居る。

芳洲の吳音
に對する意

「對馬貢銀記」に「欽明天皇之代、佛法始渡吾土、此島有一比丘尼以吳音傳之、因茲日域經論皆用此音、故謂之對馬音」などあるが、此の吳音の何たるかに就いては後世學者間にやかましい問題が持ち上り、今日でも尙ほそれが決し兼ねて居る。芳洲は此の吳音に對して如何なる考を持つて居たかといふに、先生の著「多波禮具佐(下)卷」に

「ある人吳音漢音といふ事をたづねしゆゑ、吳音は韓の字音、漢音はもろこしの字音にてさふらふ。されど年をへていつとなく此國のこゑとなりたるなりとこたへき。

鎌足の執政たりし時、百濟の尼法明といへるもの對馬にきたり、維摩經ををしへし、これを對馬よろといひて、吳音のはじめなりと政治要略にしるせりといへり。此の國の吳音といへるもの、今のから人の字音に似よりたれば、これも出

羽の枳殻にてはじめ法明がをしへたるはから國の字音なりしかどいつとな
く今の吳音となれると知るべし。

吳音といへる名は法明が維摩經ををしへし時これは吳音なりといひし故に
此國の人はしりたるなるべし。その國の字音にてをしへしを吳音といへるは、
から國の人もしりたしといふ事を今は江南こうなんといへど昔は吳ともいひたる故こ
れはもろこし訓ごゑなるといへる事を吳音音といひたるにや。から國も此國にお
なしくよみはその國のことばなれど、ごゑはもろこしのこゑをよびて出羽の
枳殻となりたるなり。」

と論じて居る。要するに芳洲は飽までも吳音即朝鮮字音説を主張して居るの
である。併し此の問題たる朝鮮字音の歴史的變遷が明かにせられた後でなけれ
ば、明かに斷言することはむづかしからうと思はれる。

漢文の讀方は古來日本と朝鮮とで大いに其の趣を異にして居ることは誰で
も知つて居る事柄である。即ち日本では訓點を附しつゝ全く日本語の措辭順に
直して讀んで行くが、朝鮮では意味の纏まつて居る語句のかたまりを字音で直

讀し、其の語句毎に吐を附しながら讀んで行くのである。此の優劣に關し芳洲は次の如く論じて居る。

「韓人讀書有七法、三層三便一該合爲七法、阿直岐王仁初教讀書之時、必當用此七法、我國人止得一法、訓讀是也、非我國人、韓、鹵也、天使之然也。」（芳洲文集）

「韓人教人讀書先以音讀、此一層也、待稍熟以反言教之、加我國人訓讀上下成讀、使知文義、此二層也、已熟又教以音讀、至於背誦而後已、此三層也、故初學者卒業之書未嘗不背誦、此我國人大學一篇或不能誦、相去遠矣。」（芳洲文集）

「とかく朝鮮人の如く音讀せざれば漢語明ならず。我國の人其用法かたきこそうたたき也。」（芳洲詠草）

即ち彼はどこまでも朝鮮式の直讀法を可なりとして居るのである。今後内地人なり朝鮮人なりに漢文教へる場合には、何れの方法に従ふべきか、根本的問題として十分研究せられねばならぬ事と思ふ。

又彼は日本人と朝鮮人との漢學に關する知識の正確不正確につき次の如く論じて居る。

芳洲の日本人の
漢字に對する
批評

芳洲の日本人の
朝鮮語學習上
の難點に關
する批評

「から人と物語せしついでに、我國は三聲のみなる故歌曲はなりがたしとかたりたり。韓人（ハナム）はものごと其ことわり明かなる故、これはなり、これはならぬといへるおぼわあれど、此國の人のそこ／＼につくりて詩なりとおぼゆるはうらめし。」（多波禮具佐）

「朝鮮人言語本於文字者爲好、其他俗下所用不據文字者、斥之爲常言（但言也）、在官者不敢出口、雖是文語少有差誤互相改正、言之所以正也、我國讀書人相會自有文語酬應、但我國讀書人少故不大興、或用文語而失本義者十有五六、非如朝鮮箕聖定封以來上下讀書爲業故一國言語必據文字讀書亦易分曉矣。」（橘窓茶話）

又彼は外國語學者だけに、時に日本語の特質などに就いても面白い觀察を下して居る。即ち

「國話長而慢其狀如何、國話サウデゴザリマス長而慢、韓話クリツソイ短而促、唐話則是一字、國話サウアリテカラ長而慢、韓話クリハタカ短而促、唐話則既一字、話々如此、奚啻天淵。」（芳洲文集）

などと日本語が冗長に流れ易いことを頻りに論じて居る。又享保四年（朝鮮宗廟十四）

年^五信使に隨行して日本に渡來した申維翰の日記「海遊錄」中に、申と芳洲との間に行はれた種々の問答が出て居るが、其の一節に、

〔余^{（申維翰）}謂雨森東曰、使余學得日本語、當用幾月而能、東曰、華語可數月而能、鮮語可一年而能、日本語雖聰明過人、非三年不可能^{（下）}。〕

といつて居る。芳洲が日本語を以て最も學習に困難なるものといつて居るのは、上述の如く日本語が餘りに長たしく、支那語の簡潔なのに及ばぬといふ考に基づくものであらう。兎に角芳洲は日本語に對しては餘りに興味や同情を持つて居なかつたやうに思はれる。

芳洲の語學に就いてはもつと深い觀察を施したのであるが、餘り専門に立至る處があるから、一先づ茲に筆を擱くことにする。